

【新技術情報-1】

## いちご「紅い雫」のブランド化に向けて

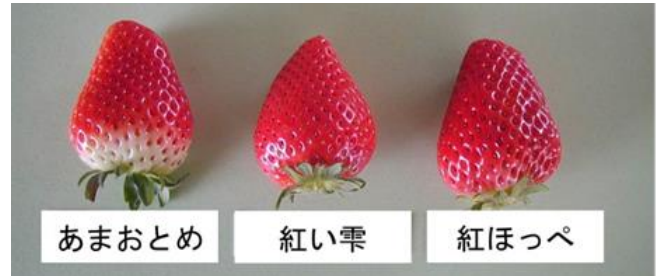
### 1. 「紅い雫」の来歴

県農林水産研究所が育成したいちご新品種「紅い雫」は、「あまおとめ」(母親) × 「紅ほっぺ」(父親) の交配により誕生し、平成 26 年 6 月 25 日に品種登録出願されました。

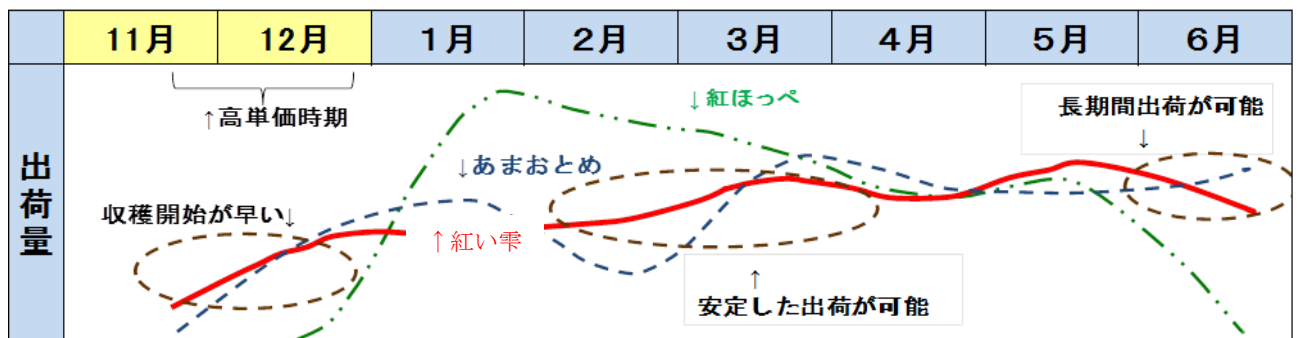
果実全体が赤く色付き、雫状の果形の良さから、「紅い雫」(あかいしずく) と命名されました。

### 2. 「紅い雫」の品種特性

- ① 糖度が高く、酸味もある濃厚な味
- ② 収穫開始時期が早い(11月中旬頃から)
- ③ 果実全体が赤く、果肉も赤く色付く
- ④ 果実が硬く、完熟出荷や長期出荷が可能
- ⑤ 土壌病害(萎黄病)に強い



各品種の収穫イメージ



### 3. 品質向上対策

いちごの収穫は早いところで11月上旬から始まり、翌年の6月末頃まで続きます。

特に、年明け以降の厳冬期には低温や日照不足などにより果実の色づきが薄い品物があると流通関係者から指摘されており、着色向上が栽培上の課題となっています。

この課題を解決するため、愛媛県とJAひがしうわが光反射シートを活用した「可動式栽培用光反射装置」(平成 26.4 特許登録済)を開発しました。

管内においても「紅い雫」の栽培圃場において、可動式光反射シートを実証導入し、効果の確認中ですが、明らかに着色が向上するなど、今後この装置の普及拡大が期待されます。



可動式光反射シートの設置

### 4. 管内での取り組み状況

- (1) 平成 27-28 年産から本格的な栽培が始まり、管内では 18 戸の農家で約 70 a が作付されています。
- (2) 産業振興課では、生産者が質の高い「紅い雫」を栽培出来るよう、定期的に生育状況や食味等の調査、また栽培管理指導を行っています。
- (3) 観光いちご園では、いろいろな品種を食べたいという来園者の声に応えるため、5か所の園で、「紅い雫」を導入しています。



【新技術情報－2】

## かんきつの早期成園化と省力的高品質生産を目指して ～松山市堀江地区における革新的技術実証の取組み～

担い手の減少や高齢化が進み耕作放棄地が増えるかんきつ産地では、規模拡大と新植・改植により、早期に高収益を得るための技術体系の確立が切望されています。そこで、松山市堀江地区のかんきつ実証圃場において、未収益期間を2年間短縮し、高品質果実の生産で収益性の高い園地の整備を目指して傾斜地園地整備技術の実証を行っています。

### 1. マルドリ方式を利用した早期成園化と省力的な高品質果実生産

園内道やハウスから雨水を集水し、太陽エネルギーを利用した自動点滴かん水施設を活用することで、大規模な傾斜地園の一斉改植でも、苗木の生育促進ができることを実証しています。

#### (1) 園内道整備と片屋根ハウスの導入による園地からの雨水集積

点滴かんがい用水の利用を目的に、園内道整備を行った圃場とハウスから雨水を集積しています。特にハウスの集水機能が強く、ハウス内での点滴かん水に必要な灌漑用水量や質の確保が可能となっています。

#### (2) 傾斜地への片屋根ハウスの活用

傾斜地に片屋根ハウスを導入し、マルドリ方式等を組み合わせて、‘紅まどんな’の雨水を利用した少水量での早期成園化と高品質果実生産が可能となります。

#### (3) 点滴かん水のためのソーラーポンプシステムの導入

傾斜地かんきつ園で太陽電池と小型ポンプを用いて、点滴かん水に必要な水圧を確保するシステムを導入しています。ポンプから点滴チューブに直接水を送らず、一旦高い場所のタンクに水を貯めるので、太陽電池を電源としたポンプを使えます。



図：太陽エネルギーを利用した自動点滴かん水施設

### 2. 運搬作業の軽労化

#### (1) 歩行型の機械を用いた作業道造成技術

歩行型の耕うん機や管理機と排土板を組み合わせた歩行型作業道造成機を用いて、緩傾斜地で簡易的に作業道を造成できる技術を実証しています。

#### (2) 園内道整備のための設計支援システム

かんきつ園の園内道の概要設計について、事前の現地測量をすることなく、パソコン上で園内道の延長や勾配などの算出および縦横断図などの作成ができます。

\*本資料は、革新的技術緊急展開事業の「果樹の省力化・軽労化及び安定生産を可能とする技術体系 公開現地検討会（資料）」より抜粋。



【新技術情報－3】

## 夏秋ピーマンにおける定植後の防風対策 ～初期生育の安定に向けて～

久万高原町は夏季冷涼な気候を生かしたピーマン産地ですが、近年、定植後（5月上旬）の初期生育が停滞することが問題となっています。その原因としては、低温だけでなく、強風による活着不良も関係していると考えられます。そこで、安定した初期生育を確保するための防風対策技術を、産地育成室久万高原駐在所の圃場で実証しましたので紹介します。

### 1. 実証内容

- (1) 供試品種：京波（タキイ種苗）
- (2) 作型：早期、ポット苗定植（セルトレイに播種→ポットに移植→適期に定植）
- (3) 栽培概要：3月9日播種（72穴セルトレイ）、5月8日定植
- (4) 栽培様式：畝幅 160cm 株間 60cm（1条植え）、ネット誘引、銀黒配色マルチ
- (5) 施肥：成分量（kg/10a） N:40.8 P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>:28.8 K<sub>2</sub>O:28.8（省力施肥体系）
- (6) 調査概要：試験区（畝の周囲に高さ 80 cm のビニールを張って風除けとする）と対照区（防風対策なし）について初期の生育、収量を比較。



写真1 防風対策の様子

### 2. 実証結果

試験区では初期の生育と収量が、対照区よりも良好となりました。



写真2 初期生育（左：試験区、右：対照区）

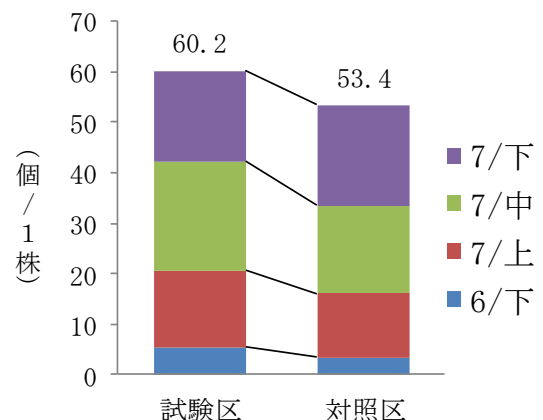


図1 初期の旬別可販収量

### 3. 考察

今回の実証では定植後の5月12日に台風が接近し、対照区では特に風の影響を受けて活着が遅れたため、写真2のような大きな差が見られました。スムーズに活着させ、初期生育を安定させることで、比例して収量も多くなります。また、今年度のような早い時期の台風の襲来に備えて、圃場周辺の防風ネットを定植後すぐに準備しておくことも必要です。

このような防風対策に加え、低段の摘果による初期生育の促進と栽培期間を通じた適期収穫、更には適切な肥培管理によって、収量の増加と経営の安定を目指しましょう。